拝啓　今年も早や９月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年はもう９月下旬だというのに蒸し暑い日が多く、毎日を過ごすのに苦労されたことと思います。近所の公園では、百日紅の花の残りが咲いております。

今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第４回目です。今回のエンカウンターの８頁「全部内村鑑三から聞いたこと」には、次のように書かれています。

「全部内村鑑三から聞いたこと

私は今日のこの説教を復習、勉強させて頂きましていたら、ここに書いてあること、聖書の文句、私のこれから話しをさせて頂くこと全部、私のものというものはない。これは内村鑑三先生から教わった。内村鑑三から聞いたことです。また、内村鑑三先生以外の２、３の注解書の大先生、世界の大先生の方々の教えで、文字になっていることを私が読んだ、receive した、受けたことだけです。私のものというのはない。

そうですから、私はこの話をしておりますけれど、まったく小西芳之助のものというのはない。全部内村鑑三から聞いたこと、その他の大先生から聞いたことを繰り返しているだけです。…

あなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。これが、ちょうど、私の説教に当てはまる。私の説教、私の聖書講義は、私自身から出たものではなく、神の賜物である。神から人を通じてですから、内村鑑三その他の大先生、また友人、その他から、その賜物である。」

小西先生の説教は、録音されて残されていますが、内村鑑三先生の時代には、録音器がなく、説教の録音は残っていない。それでも、小西先生が、自分の説教は全部内村先生から聴いたことだとおっしゃるのですから、これは貴重な証言になると思います。十字の贖い、復活、と内村先生の力説されたところが想像がつきます。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』8 月 29 日

「イエスの十字架の意義

イエスの十字架の重大なる意義は、来世は今世よりも重大であることをイエスが教え給うたことである。

イエスはこの世にもっと長く生きることが可能であったのに、十字架の死をお選びになった。これが神の意思と知り給うて。そして、彼は天国に帰られて、われらに、来世は今世よりももっと大切であることを教えて下さった。

そうであるから、我らは、わがままな願いを満たすためにこの世にかじりついてはならない。」

新渡戸稲造先生『一日一言』9 月 15 日

「好しと認めたものは、即座に実行に取りかかるがよし。躊躇する間に決心は薄らぐ、善事をなすに月日を選ぶ要はない。善行する日は吉日、吉日を待つ間に吉日は去り行きて凶日のみ残るなり。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「手探りの人生」

「いくつになっても分からないのが人生というものである。世の中というものである。それなら手探りで歩むほか道はあるまい。わからない人生を、わかったようなつもりで歩むことほど危険なことはない。わからない世の中を、みんなに教えられ、みんなに手を引かれつつ、一歩一歩踏みしめてゆくことである。謙虚に、そして真剣に。おたがいに人生を手さぐりのつもりで歩んでゆきたいものである。」

内村鑑三先生『続一日一生』9 月 13 日

「神の教えであるキリスト教は、了解（わか）って了解るものでない。信じてわかるものである。わからないから信じるのである。わかれば信ずるの必要はない。そしてわかってしまって、信ずるの必要なき宗教は、真の宗教でないから、わかる必要のないものである。宗教は、もとこれ信ずべきものであって、わかるべきものではない。信ずればこそ、宗教に能力があるのである。キリスト教が神の教えである最も明らかなる証拠は、それがわかりそうでわからないことにおいてある。その点において仏教は違う。仏教はわかる。ゆえに仏教徒は言う、仏教は宗教にあらずして哲学であると。それ故に、仏教は解しがたしといえども解し得ざるにあらず。されどもキリスト教は、信ぜずしては到底わからない。我を折り、我が罪を言い表わし、我が無知、無能、不善を認めて、神の前にへりくだりて初めて、キリスト教の何たるかがわかる。キリスト教は傲然として、これをわがものとなすことは出来ない。嬰児のごとき者となりて、神の前に平伏して、彼に教えられて、その奥義に達することが出来る。」

バークレー先生『ウイリアム・バークレイの一日一章』（9 月 16 日）

「人は自分だけで生き、自分だけで死ぬのではない。我々のために大事なものを残してくれた、そして歩むべき道を示してくれた人々を忘れるようなことがあってはならない。

　私が彼らを失望させることなく、彼らに対してあくまでも忠実に、彼らの歩んだ道を歩みつづけるためには、彼がやったと同じように私も自分の人生において日々毎瞬イエス・キリストに従って生きるほかはない。

　終わりなき歳月の回転のうちに世代は起こり、世代は消えてゆく、がイエス・キリストは昨日も今日もとこしえに代わることがない（ヘブル 13・8）

　イエスの御腕が短くなることはないし、その力がおとろえることもない。」

レテー・B・カウマン先生　『荒野の泉』9 月 13 日

「朝は、私の主にお会いするために定められた時である。朝という言葉は豊かなぶどうの房のようである。さあこれをつぶしてきよい酒を得よう。朝において然り、神は朝において、力と希望が豊かであるようにもくろみ給う。私は弱いままで登ってはならぬ。夜には昨日の疲れを葬り朝に新らしい力の拾収をする。朝がきよめられたその日は幸いである。祈りで最初の勝利をあ得した日は、成功の日である。その夜明けが、山の頂きにあなたを見出す日は、きよい日である。

わが父よ、私はあなたに行きます。平凡な野原にある何物も、清い高所に行く私を妨げません。あなたの命令によって、私はあなたに行きます。それゆえ、父よ、私に会って下さい。山の上の朝よ、このように始められた一日のすべての残りは、私を強くし、また喜ばせるでありましょう。

月本昭夫先生が、イエス・キリストの十字架の贖いの説明として、過越しの祭りで羊が葬られることとイザヤ書 53 章の預言を上げられましたが、早稲田教会のオレオス会（9 月 14 日）で、その話と石館守三先生が、黙示録第 5 章の子羊の説明を、旧約聖書の過越しの祭りの子羊、イザヤ書第 53 章の罪を贖うイエスの到来の預言として説明されたことを話しました。

9 月 17 日（火）佐生和子さん（故佐生健光さんの奥様）の葬儀が市川であり、参列しました。(9 月 9 日召天、94 歳）下谷教会の藤田義哉牧師の司式で、立派な式辞でした。高円寺からの出席者としては、小沢辰男先生の息子さん（下谷教会）にお目にかかりました。牧師夫人藤田泉さんにご挨拶出来ました。

新型コロナについては、病院やクリニックではマスクをつけるように指導されていますが、電車の中とかスーパーでも、さすがこの夏・初秋の暑さの中では、マスクをしない人の方が多くなりましたが、外出された後の手洗い、うがいなどは、実行されて、十分ご注意して、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024 年 9 月 23 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位